
妖幻抄 4章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖幻抄 4章

【Nコード】

N0861A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

勝手にいなくなった罰として、首輪を付けられた明。けど、なんとか抜け出そうとして…？

ヤキモチ（前書き）

初めましての方も、そうでない方も、こんにちわ。維月です。
どたばたコンビ（？）の二人。

今回はちよっぴりギャグ入りかも…（笑）
楽しんで、読んでいただけると幸いです。
これから、どうぞよろしく。

ヤキモチ

勝手にいなくなった罰として、後日、明は仕置きを受けた。

「こーら、じつとしてろ…騒いだら、余計に苦しいぞ?」

「やだつ、首輪なんか付けてつ、外してつ、外してよーっ!」

「ダメだ、お前、すぐいなくなるし」

「いや　　っ!？」

「ん？」

氷雨は、戸口に寄りかかっていた友人に気づき、かけ寄った。

「どした? 疾風^{はやて}、うるさいだろう、コイツ」

氷雨が、疾風、とよんだ少年は、以前、崖の上から、明たちを見張っていた少年だった。

「よつ、明…なーんだ、首輪つけられてんのか。かわいそうじゃねえか、外してやれよ」

「い　　や、ダメだ。コイツときたら、すぐいなくなるうとする」

「それが普通だろうがよ、なー? かわいそーに」疾風は、明の首輪をゆるめてやる。

ぐしゃぐしゃ、と髪を撫でられ、暴れる明。

「氷雨、意地悪い…だから、いうこと、きかない」

「ったく、お前…サドだぜ? こんな可愛いヤツいじめてって、およろ?」

明が、いない。あるのは、外れた首輪だけ。

「逃げた　　っ!？」

「まあ、戻ってくるさ。懷いてンだろ? ぶほっ!」

氷雨、疾風を殴る。

「あいつ捕まえるのに、どんだけ苦労したと思ってやがる! 搜すぞっ」

「ってえなあ…わーったよ!」

「もたつくな、あいつ…すばしこいんだからっ」

「ってて、殴んなくたっていいだろうに、明　っ、どこだよー！て、いるじゃねえか。なあ、氷雨…見ろよ、あれ、人間の雄だぜ？」と、疾風。

明は、村はずれの、茂みにいた。

「ホントだ、ってちがう！明、明…戻ってこい」

明は、つんと顔をそむけ、人間の雄を連れて、森の中へと、入っていった。

「あつ、あんにやろう…」

「おーおー、嫌われてンなあ…それより、早く捕まえなきゃ、やばいんじゃないか？」

ニヤニヤと笑いながら、疾風は、氷雨の脇を小突く。

「分かってるっ、お前はそこにいろ！！」

「ほーうい」

一方、明と同族の雄は、明に気があるようだった。

しきりに、木の実や、小石、鳥の羽なんかを差し出している。

心なしか、明が嬉しそうに見え、氷雨は、胸につかえをおぼえた。

（あいつ、あんな顔して笑ったっけ？なんで、俺にじゃ…ないんだろっ）

我慢できなくなり、氷雨は、藪から飛び出した。

「明っ…こつち、こいつ。帰るぞ！」

氷雨が踏みだすと、人間の雄は、身じろいで一歩下がった。

明は、慌てて、雄に言い含めるようにすると、一言、逃げてと言った。

人間の雄が行ってしまうと、明は、ゆっくりと氷雨の傍に歩み寄った。

「行くぞ明、早くこい」

そう言う、氷雨の声は冷たい。

明は、少し寂しそうに、後ろを振りかえる。しかし、すぐに氷雨の後に、ついていった。

本心（前書き）

互いを必要としているのに、やっと気づいた二人。
二人が、葛藤の果てに、見いだすものは…！？

本心

「勝手にいなくなつて… ったく」

小言を言う氷雨に、明は押し黙つてしまった。

（しかも、コイツのあんな顔… 見たことねえ）

「ごめん、氷雨… 怒らないでくれ」

「べつ、別に怒っちゃないぜ、なに言つてる」

氷雨は、慌ててそっぽを向いた。

「でも、怒つた力才…」

「んなこた、どうだつていい。メシでも食つてろよ」

氷雨は、乱暴に皿を近づける。

「氷雨…」

「どうした、食わないのか？」

皿を押しつけ、明は、氷雨の背中に抱きついた。

「な… あ、明？ おいおい…」

「怒るな、ごめん… 久し振りに、人間を見て嬉しかったんだ。怒らせるつもりなんて、なかった」

「なつ、泣くな　　っ！ 明、泣くンじゃねえっ」

泣き出した彼女に、慌てまくる氷雨。

「あ　　らら、ダメじゃねえか… 泣かして。なんなら、こっちくるか？ 明」

「疾風、女好き… だから、イヤ」

「つとと、お前が言うのと刺さるなあ… ま、ケンカするほど仲はいいつて言うしな。お前らがデキてんのは、黙つててやるさ」

「でっ！？ なんでそうなるっ！ 違うだろ、そこっ。コイツは、ただのペットだよ」

「だあつてよお… 女ども、今のその話で持ちきりだぜ？ 寝床も、一緒なんだろ？」

「そっ、それはだなっ…」

しどろもどろの氷雨。

「明……お前、氷雨が好きか？」

「好き。優しくしてくれる、氷雨は好きだ」

「おいおい氷雨え、なにやらしいコトしてんだよ？え？そういや、明……お前いくつだよ、分かるか？」

うつとりと話す明を、疾風はからかった。

「じゅう……17、だ」

「いい頃だなあ、氷雨……いでっ！」

「お前の方が、よっぽどやらしいぞ！コイツとは、なんでもないと
言ってるだろうが！」

「それはそうと、いないぜ？明」

「え……明！？」

明は、走った。

力一杯走って、早く、ここから離れてしまいたかった。

「氷雨は、あたしが嫌いになったんだ……だから、あんな事言っただっ！」

（どうせ、妖と人間は……一緒にいられないっ、それが言いたかったんだろ？氷雨）

「なんで、こんなに苦しい！あたしは、一人でも生きていけるのにっ」

明は、蹲^{ひづ}った。

涙が、後からあとから流れて、止まらない。

（氷雨……好きなのに、なのに、どうしてっ！）

「なあ、氷雨……もうちつとな、素直になれよ。好きなんだろ？明が疾風は、欠伸をしながら言う。

「だけだよオ」

「なに悩んでんのかは知らねえが、素直になればいい、それだけだ」
「分かってる、でも……上手く言えねえんだよ。言おうとしたことの、
反対を言いそうで」

「あ……　　っもう！うだうだ悩んでねえで、さっさと行ってこ

い！明を見つけたら、もう絶対離すンじゃねえ！いいなっ」

疾風は、氷雨を引っ張り上げると、背中を突き飛ばした。

「あ、ああ！」

「早く行けっ！」

頷いて、氷雨は走り出した。

（始めから、分かっていたはずだ…会ったら、言ってやる！明…）

明は、崖の上にいた。

谷底を流れる川に、小石を落とす。

「ここからなら、楽に死ねそうだ」

踏み出そうとした、彼女の腕を、何者かが掴んだ。

「なっ！お前…さっきの」

明の腕を掴んだのは、さっき、彼女が逃がした雄だった。

「死ぬ、ダメ…生きる」

「お前、話せるのか！？」

人間の雄は、嬉しそうに何度も頷く。

「レキ、いう、名前、レキ」

「あたしは…明。レキは、一人なのか？」

「いない、だから、家族、作る」

「連れを捜しているのか、見つかるといいな」

「もう、見つけた…明」

「え！？」

「明、今…一人」

一人、という言葉に、明は、顔をそむけた。

「一人じゃ、ない…あたしは」

（今、村を出てきたじゃないか…一人、だ）

「明、泣いてる…」

レキはおろおろする。

「どっ、どうしてダメなんだ！好きなのにつ！こんなに、愛してるのに　っ！？」

「明…！」

走り去った明を、レキは追わなかった。

（気配が、近い、待ってる…明、今行くっ）

氷雨は、木々の間を走り抜け、やがて、すぐに明を見つけた。

明は、白い花の群れの中に、横たわっていた。

しきりに、しゃくり上げる音がする、泣いているようだ。

「明…明、俺だ」

氷雨は、そつと明の肩を揺らした。

「氷雨え…あたし、傍にいたら、ダメなの？好き…なのに」

「泣くな…」

氷雨は、明を抱き上げて、言った。

「今まで、すまなかった。俺は、逃げてばかりだ」

しゃくり上げたまま、明は、黙っている。

「許されるなら、好きと言いたい。明…」

「氷雨、一人はいやだ、傍に、いてくれ」

明は、氷雨の胸に、頬ずりして甘えた。

幼い子供のように、必死にしがみついている。

「明…いい子だから、泣くな」

涙を拭い、明は頷いた。

「うん。そばに、傍にいても、いい？氷雨、好き」

涙声で、語尾が掠れている。

「明！」

氷雨は、明を抱きすくめていた。

「く、苦しい…氷雨っ」

「お前を、一人にしない！だから…お前も、もう勝手にいなくなるなっ」

「氷雨…」

「愛してる、どうしようもないくらいっ…だから、ずっと、一緒だ」
搾りだすように言って、氷雨は俯いた。

その顔は、これでもか、というほどに赤くなっていた。

「嬉しい、氷雨。もう、ずっと一緒…いなくなったりしない」

明は、そっと氷雨の頬に触り、静かに唇を重ね合わせた。

それとほぼ同時に、氷雨は、いとおしむように明に口づけ、舌を絡めた。

「ひっ、氷雨っ！」

明は、氷雨の胸を押し返して、座りこんだ。

「あ、すまん…急に、嫌だよな？ンなこと」

ふるふる、と首をふる明。

「恥ずかし、かったの…」

今にも、消え入りそうな声で、明は言う。

「帰ろうか」

「え？」

「家に、帰ろう？」

「うん！」

差しだされた、氷雨の手を握って、明は笑いかける。

氷雨も、柔らかな笑みを返した。

幸せに浸る二人を、次なる、新たな事件が襲おうとしていた。
いまは、まだ…なにも、知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0861a/>

妖幻抄 4章

2010年10月28日04時10分発行